

E-17 タブーよりみる日本人の生活慣習 - 大分県蒲江町尾浦の場合 -
大分大教育 ○根茂美代子

目的 昨年発表した、秩父郡大滝村のタブー調査に引き続き、今回は特に、漁民の生活慣習にしほり、どれ程タブーが受け入れられていて、どのように生活に密接しているかをみた。

方法 対象地域は豊後水道域である。大分県蒲江町の中でも唯一の専業漁業を営んでいる尾浦を選んだ。調査方法は、前回と同じく、第一調査で、昔から尾浦に伝わるタブーについて採集し(1321個)、それをもとに、第二調査において、16歳以上男女300人に、アンケート調査を行った。分析方法は前回と同じく、百分率および評実法を用いた。

結果 今回のタブーは、「生命力の勝ち負けを忌む」、「食制の忌」に関するものが多く、「日月年の忌」に関するものを加えた。「葬式の忌、死のけがれ」に関するものが数多く、35個も採集され、平均評実も3.8と高いが、大滝村の3.7と差はない。しかし、全体的にみると、回収された中でも、若年層(16~39歳)の数が多く(大滝が全体の24.5%に対し、41.0%である)のに、個人別平均評実や、各々タブーの評実の平均は、大滝が2.3に対して、3.0と高く、又、評実3.0以上のタブーが68個と、全体の51.5%もあった。これより、一応、山村より漁村の方が、タブーの肯定度、依存度が高いといえよう。生業に関するタブーの平均評実は、大滝より高いが、全体的には低い。これは、漁業形態の変化(共同作業から各家庭単位へ)や、機械化などに共なる生活の変化によると思われるが、例えば、女性の漁に関するものが、出産などのものより評実が低い。これも、漁業形態の変化により、家庭単位(夫と妻との共同作業)になってきたことに由ると考えられよう。